

診療に漢方を生かす総合診療医

大学院医学系研究科 総合医療学講座 准教授

佐藤 浩子

さとう ひろこ

大学院医学系研究科総合医療学講座の佐藤浩子准教授は医学部附属病院「総合診療科」で臨床も担当する「総合診療分野」の指導医である。また、東洋医学（漢方）のスペシャリストでもあり、「和漢診療」を担当し、「がん漢方サポート外来」も設けている。「東洋医学は総合医療と補い合う」と語る。

医学生を対象にした漢方医学実習の教育にも力を注いでいる。



— 東洋医学に関心を持ったきっかけは何ですか。

私は医学部を卒業後、永井良三先生（現自治医科大学学長）率いる第二内科に入局しました。医学部附属病院の内科が現在のように臓器別に分かれる前は、第一から第三内科まであり、それぞれが内科全般を診ていました。その中で第二内科は主として循環器、糖尿病、呼吸器を専門としていました。

研修期間が終わり、専門分野の専攻を選ぶ段階になり、どちらかというひとつの専門科に進むのではなく、「診療科と診療科の間にある病態」を見るような仕事がしたいと考えるようになりました。いろいろ考え、2004年、自分のイメージに一番近い総合診療部（現在の「総合診療科」の前身）に移りました。

ある日、総合診療部に受診した患者様の中で、診断困難な症例を担当しました。ある症状についての相談で受診されましたが、よくお話を伺うと、それ以外にも多数の症状を抱えていました。症状を説明できる診断がつかないため、治療方針が決まりませんでした。それでふと、“漢方はどうかな”と考えました。

❖ 漢方は総合医療に役立つことを確信

— なぜ漢方かなと思ったのですか。

西洋医学でうまくいかない時に漢方を考えてみて良いのでは、と考えたからです。当時、本学には「統合和漢診療学講座」という寄付講座があり、富山医科薬科大学（現富山大学）から二人の指導医が着任され、総合診療部の診察室と隣り合わせて診療に当たっていました。この診断困難例について相談し、ある漢方薬を薦められ処方したところ、2週間後の再診時、相談いただいていた全ての症状が改善していました。

“漢方って面白い！”と感じ、漢方は総合医療、プライマリ・ケアに役立つことを確信した瞬間でした。

❖ 多いコロナ後遺症

— 臨床の現場で今、診ておられるのはどういう患者さんですか

はじめから「和漢診療」に受診される新患の方はそんなに多くありません。総合診療科に受診し、西洋医学的な



アプローチがなかなか難しいなという患者さんが多いですね。例えば慢性疼痛であったり、機能的疾患であったり、ここ1年ほどはコロナ後遺症(新型コロナウイルス罹患後症状)を多く診療しました。また、現在の治療にプラスして漢方で補助的な治療をしてほしいという方ですね。

水曜日には「がん漢方サポート外来」を設けています。がんの患者さんをすべて漢方で治します、というわけでは決してありません。化学療法中の方など西洋医学で治療している方のなかで、疲労感や食思不振などの症状を抱えておられる方です。がんそのもの、あるいはがんの治療に伴って生じてくる症状に対して漢方でサポートするというものです。

❖ 「元氣をつけること」と「温めること」

— 西洋医学で治療が難しいというのはどういうものですか。

近年の疾患では、コロナ後遺症だと思います。一番多いのは、倦怠感が続いているもの。コロナ後遺症のだいたい4割ぐらいを占めています。そのだるいという症状を、西洋医学でいろいろ検査しても、これは、という原因が出てこない方が多いです。数値には表れないけど機能が悪く、慢性疲労に移行するような方もいます。

そういう症状に対し漢方ができることは大まかにいって二つあります。一つは「元氣をつけること」、もう一つは「温めること」です。

— 元氣をつける、というのは西洋医学にはないのですか。

直接的に元氣をつけようという治療はありません。もちろん、「充分休養をとってください」など指導は行います。

— 西洋医学ではできないところですね。

漢方には、虚実という考え方があります。このうち「虚」は「足りない」「ためられない」という概念です。ですから、元氣をつけるという方法が出てくるのです。

免疫力などについてしっかりしたエビデンスがあるわけではありませんが、長い歴史のなかで、経験則として治療法が確立されてきたということになります。

❖ 全国の大学医学部で漢方医学教育

— ホームページ等によると、現在の研究テーマの一つがコロナ後遺症ですね。また、医学生を対象にした「漢方医学実習の教育効果に関する研究」にも取り組んでいます。

はい。現在、医学生向けの「モデルコアカリキュラム」に漢方が盛り込まれています。具体的には、和漢薬の使用の現状などについてですが、カリキュラムが改訂され

るたびに修得すべき内容が増えています。現在、全国の大学医学部で漢方医学教育が行われています。ただ、わかりにくい漢方をどう教えるか、課題が少なくなく、そこを研究しようとするものです。

日常診療で漢方を生かすことのできる臨床医の育成を目的として、全国82医学部の漢方医学教育担当で構成される「日本漢方医学教育協議会」が発足しており、ワーキングを経て漢方医学教育のあり方を討論しています。その中で、「基本がわかる漢方医学講義」(羊土社)というテキストが作成され、私も「代表的な漢方処方」の構成と効果、副作用」のサブリーダーとして分担執筆しています。このテキストの意義は、漢方医学教育の標準化、また卒業時の到達目標を大学間で共有したカリキュラムとして構成されていることです。

— 抱負をひと言。

東洋医学は、扱う疾患の幅広さと奥深さの両方を味わうことのできる大変興味深い分野です。東洋医学は、総合診療と、とても相補的であると感じています。総合診療、漢方、いずれの領域でも興味を持ってくださる若い人材を育てたいと常に思っています。そのために自らも研鑽を続けていきたいと思っています。



医学生向け漢方医学教育
＜臨床実習における漢方演習＞少人数グループでのアクティブラーニング